

◆連載

いま留萌むかし 第三十三話

●ルモイと武四郎

蝦夷の海や

氷も溶けて
なかりけり

霞のおくにも
春やしるらん

これは松浦武四郎の「西蝦夷日誌」のなかに詠われているものである。臼谷の浜にてと注釈がついている。

松浦武四郎。この名前は北

海道の歴史を考える上で欠かすことの出来ない名前である。現在使われている「北海道」の名付け親であり、郡名等も総て彼が名付けたものである。また、彼が残した多くの著作は当時の蝦夷地を知る上で第一級資料であり、これなくしては近世の北海道の歴史を語ることはできない。

留萌も例外ではない、ルルモツペと呼ばれていた頃の留萌のことを知ろうとするならば彼の残した日誌類を無視することは出来ないのである。彼が留萌を訪れたのは弘化

三年（一八四六）と安政三年

（一八五六）の二回である。

そして、弘化の時の記録は

「再航蝦夷日誌」、安政の時の記録は「西蝦夷日誌六編」

の中に収録されている。この二つの日誌を見比べていくと

わずか十年の間にルルモツペの姿がいかに変わったかを知ることが出来る。弘化のとき

礼受の浜を通った時には一軒の人家もなかったのに安政に

再度通ったときは、和人の出稼ぎ小屋が建ち並び、すごい

繁盛をみせている。これを見て武四郎は驚きをかくせず

に

留萌の河口には運上屋があり、通行屋、備米蔵、勤番所

板蔵十四棟、茅くら七棟、大工小屋、鍛冶小屋、木挽蔵、

船蔵二、漁屋二の建物が並び、対岸には弁天社、稲荷社、伊

勢社の美しく立派な社が建ち並んでいた。また留萌川の河

口には七八百石積みの船が二

三艘繋げたという。

当時留萌場所の請負人は栖原六右衛門で苫前、天塩場所

も請け負っていた有力な場所請負人であった。特にルルモ

ツペは西海岸で栖原の請負場所の中心地であった。

武四郎は文政元年（一八一八）伊勢国（三重県）に生ま

れ、十六歳の時に家をでて諸国漫遊の旅にでる。四年間で

東海、関西、山陰、山陽、四国、九州をまわり、長崎で重

病になり、九死に一生を得る。この時に蝦夷地に関する情報

を得たらしい。弘化元年（一八四四）初めて蝦夷地へ渡ろ

うとしたが松前への渡航の厳重な取り調べがあり、目的を

果たせなかった。しかし、その翌年蝦夷地への憧れはやま

ず最初の蝦夷地渡航を果たす。その後、いろいろなことがあ

りながら計六回の蝦夷地探検を果たし、明治維新の時には

蝦夷地に関する第一人者にな

っていた。

このため、

明治元年

（一八六

八）明治

政府に登

用され、

北海道の

名付け親

となつた

のである。

しかし、

明治三年

には開拓

判官を辞

職し、東

京で静か

な晩年を

送ってい

る。明治

二十一年

（一八八

八）脳溢

血で死去

享年七十

一歳であ

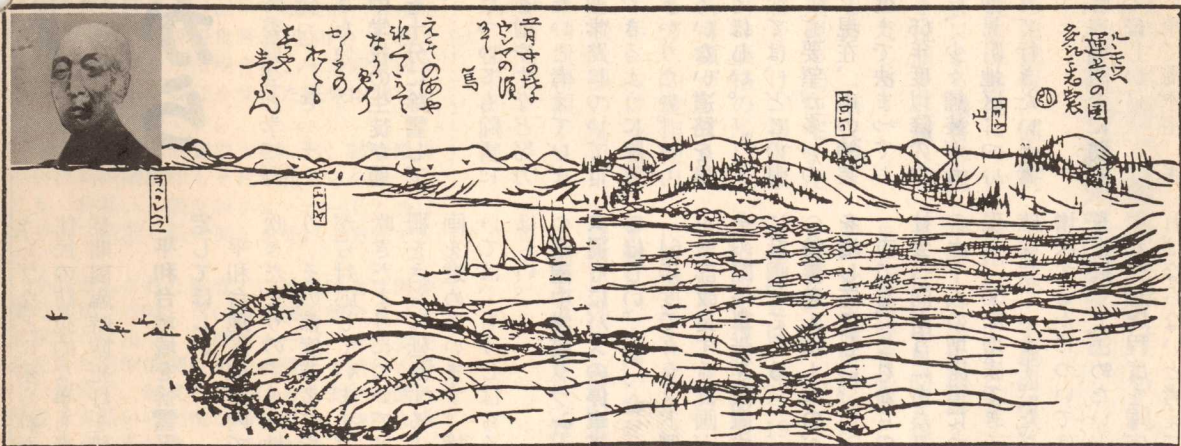
つた。

今年で没

後百年に

あたる。

合掌。



西蝦夷日誌のルルモツペ

るもい

●特集 快適なまちRUMOI、もうすぐおめみえ、新しい施設

昭和63年11月／発行・留萌市
編集・企画 振興
印刷・白鷺印刷株式会社

1988

11